家康

坂口安吾

青空文庫

徳川家康は狸オヤジと相場がきまっている。関ヶ原から大坂の陣まで豊臣家を亡すための小細工、嫁をいじめる姑婆アもよくよく不埒な大狸でないとかほど見えすいた無理難題の言いがかりはつけないもので、神君だの権現様だの東照公だのと言いはやす裏側で民衆の口は狸オヤジという。手口が狸婆アの親類筋であるからで、民衆のこういう勘はたしかなものだ。

けれども家康が三河生来の狸かというと、そうは言えない。晩年の家康は誰の目にも大狸で、それまで家康は化けていたというのだが、五十何年も化けおおせていた大狸なら最後の仕上げももうすこしスッキリとあかぬけていそうなものだ。関ヶ原から大坂の役まで十年以上の時日があり、その間家康はすでに天下の実権を握っており、諸侯の動きもほぼ家康に傾いていて、彼が大狸ならもっとスッキリやれた筈だ。十年余の長い時間がありながら彼のやり方は如何にも露骨で不手際で、まったく初犯の手口であり、犯罪の常習者、あるいは生来の犯罪者の手口ではなかったのである。

十三の年に伊豆へ流されてそれから三十年、中年に至るまで一介の流人で、田舎豪族の娘へ恋文でもつけるほかに先の希望もなかった頼朝だが、挙兵以来の手腕は水際立ったもので、自分は鎌倉の地を動かず専ら人を手先に戦争をやる、兵隊の失敗、文化人との摩擦など遠く離れて眺めていて、自分の直接の責任にならないばかりか、改めて己れの命令によって修正したり禁令したり、失敗まで利用している。こうして一度も京都へ行かないうちに天下の権が京都から鎌倉へ自然に流れてくるような巧みな工作を施したものだ。

もっとも頼朝の場合は京都を尊敬するという形式を売って実権を買ったので大義名分があり、京都の方に敵もあったが味方も多い。藤原一門の対立の如きものもあり、九条兼実の如く頼朝から関白氏の長者を貰って、頼朝に天下の実権を引渡すような、いつの世にも絶えまのないエゴイストの存在が巧みに利用せられているのである。

家康の場合は先ず根本が違っていて、豊臣徳川は同一線上に並立するものであり、朝廷と武家というぐあいに虚名を与えて実をとるということができない。亡ぼすか、さもなければ四五十万石を与えて自分の家来にするか、どっちみちその一方が名も実権も共にとらざるを得なかった。彼は征夷大将軍を称し頼朝の後裔たることを看板にしたが、幕府の経営方針などにも多分に頼朝を学んだ跡があり、義経だ行家だとバッタバッタ近親功臣を殺してまで波立つ元を絶っていった血なまぐさいやり口まで頼朝に習った感がある。昔はそうでなかったのだが初犯以来は別人で、だんだん慾がでてきたのである。豊臣家乗取りの方策などでも出来れば頼朝の故智を習って綺麗にやりたかったであろうが、何と云っても両家対立の事情と朝廷武家対立の事情とは根本が違うので綺麗ごとというわけに行かない。元来が保守的な性癖で事を好まぬ家康で、狸どころか番犬のような気の良いところもあるのだが、ええママヨとふてくされて齧りつくと忽ち狂犬の如くになったので、アラレもなくエゲツないやり口が寧ろ家康の初々しさを表していると見てもよい。

信長が横死する。いちはやく秀吉が光秀を退治して天下は秀吉のものとなったが、同時に世人は家康を目して天下の副将軍というようになった。小牧山で戦闘の上では秀吉をたたきつけていることが評価せられた意味もあるし、信長とは旧来の同盟国の家柄で成上りの秀吉とは違うというようなその不遇に対する同情もあった。然し、

家柄への同情といっても本人に貫禄がなければ仕方がないので、織田信雄が信長の子供だと云っても実力がなければ仕方がない。万事実力が物を言う戦国時代であった。

ところが実力といっても各人各様で、人物評価の規準というものは時代により流行によって変化する。陰謀政治家が崇拝せられる時期もあれば平凡な常識円満な事務家の手腕が謳歌せられる時期もある。家康がおのずから天下の副将軍などと評されるようになったのは、たまたま時代思潮が彼の如き性格をもとめるようになったので、彼は策を施さず、居ながらにして時代が彼を祭りあげて行った。

当時の時代思潮は何かといえば、つまり平和を愛し一身の安穏和楽をもとめるようになったということだ。一般庶民が平和を愛するのはいつの世も変りはないが、槍一筋で立身出世をし、戦争を飯よりも愛した連中が戦争に疲れてきた。

日本の戦争は武士道の戦争だなどと考えると大きな間違いで、日本の戦史は権謀術数の戦史である。同盟だの神明に誓った血判などと紙の上の約束が三文の値打もなく踏みにじられ、昨日の味方は今日の敵、そうかと思うと昨日の敵は今日の味方で、共通する利害をめぐってただ無限の如く離合する。一身の利害のためには主を売り友を売り妻子を売り、掠奪暴行、盗賊野武士から身を起して天下を望むのが自然であるから時代の道徳も良識もその線に沿うているのは自然である。

親類縁者といえども信用できず、又、信用しておらず、常時八方に間者を派し、秘密外交、術策、陰謀は日常茶飯事だ。ルールというものはなく、ルールというものがありとすれば、力量や器量にまかせて何をやってでも勝てば良い、勝った者に全ての正義があるというルールなのである。力量に自信ある者、野心家、夢想児にとって、力ずくの人生は面白い遊戯場だ。ところが力にも限度があって、昨日の大関、関脇などが幕下へ落ち遂には三段目へ落ちて引退するというようなことにもなり、限度は力業には限らない。智力にも限度があり年齢があるものだ。気力とてもそうである。

芸術の仕事はそれ自体がいわば常に戦場で、本来各人の力量が全部であるべきものである。力量次第どんな新手をあみだしても良く、むしろ人の気附かぬ新手をあみだすところに身上があり、それが芸術の生命で、芸術家の一生は常に発展創造の歴史でなければならないものだ。けれども終生芸に捧げ殉ずるというような激しい精進は得難いもので、ツボとかコツを心得てそれで一応の評価や声名が得られると、そのツボで小ヂンマリと安易な仕事をすることになれてより高きものへよじ登る心掛けを失ってしまう。別段間者がいるわけでもなく寝首をかかれるわけでもなく生命の不安があるわけでもない芸術の世界ですらそうなので、自由の天地へつきはなされ、昨日の作品よりは今日の作品がより良くより高く、明日の作品は更に今日よりもより高く、と汝の力量手腕を存分にふるえと許されると始めは面白いやってみようという気でいても次第に自分の手腕力量の限度も分ってきて、いざ自分がやるとなると人の仕事を横から批評して高く止っていたようには行かないことが分ってくる。それで始めの鼻息はどこへやら、今度は人のつまらぬ仕事までほめたりおだてたりするのは、自分の仕事もそのへんで甘く見逃して貰いたいという意味だ。

本当に自由を許されてみると、自由ほどもてあつかいにヤッカイなものはなくなる。芸術は自由の花園であるが、本当にこの自由を

享受し存分に腕をふるい得る者は稀な天才ばかり、秀才だの半分天才などというものはもう無限の自由の怖しさに堪えかねて一定の標準のようなもので束縛される安逸を欲するようになるのである。

戦国時代の権謀術数というものはこれ又自由の天地で、力量次第というのであるが、こうなると小者は息がつづかない。薬屋の息子だの野武士だの桶屋の倅から身を起して国持ちの大名になったが、なんとかこのへんで天下泰平、寝首を掻かれる心配なしに、親から子へ身代を渡し、よその者だの自分の番頭に乗ッ取られるような気風をなくしたいということを考えるようになった。

信長が天下統一らしき形態をととのえ得たころから諸侯の気持はだいたい権謀術数の荒ッポイ生活に疲れて、秩序にしばられ君臣の分をハッキリさせて偉くもならぬ代りに落ぶれも殺されもしない方がいいと思うようになってきた。秀吉の朝鮮征伐に至って諸侯の戦争を厭う気持はもうハッキリした。そこでそれまでは松永弾正だの明智光秀のような生き方がまだ通用していたのだが、その頃からはこういう陰謀政治家やクーデタ派は一向に尊重せられない気風となり、諸侯は別に相談したわけでもなく家康を副将軍と祭り上げ、それにつづく人物は前田利家だときまってしまった。これが三十年前、信長青年頃の世相であったら家康だの利家が人物などと言われる筈はない。黒田如水とか島左近などというのがむしろ人物と言われたであろう。

家康の出処進退というものは戦国時代には異例であった。彼は信長と同盟二十年間、ついぞ同盟を破らなかった。同盟を破らないのは当り前じゃないか、と今日は誰しも思うであろうが、当時は凡そ同盟をまもるということが行われておらぬので、利害得失のために同盟を破るのが普通であり、損を承知で同盟をまもり義をまもるなどとは愚かであり、笑うべきことであり、決して美談だとは考えられておらなかった。家康はその愚かにして笑うべきことを二十年間まもりつづけ、信長の乞いに応じて勝つ筈のない信玄相手の戦争もやる。この戦争のときは家来が全部反対で、絶対に勝ちみがないのだから同盟の約を破って信玄に降伏する方がいいと主張したものだ。戦争を主張し同盟を守ることを固執した唯一の人物が家康であった。そして予想せられた如く完膚なく敗北し、家康は血にそまって、ともかく城へ逃げ帰ることができたのである。そうかと思うと姉川の戦には乞いにまかせて取る物もとりあえず駈けつける。金ヶ崎で退却となり、退却の殿りのいのちがけの貧乏籤を木下藤吉郎と二人で引受ける。家康はこういう気風の人で、打算をぬきに義をまもるという異例の愚かしいことをやり通した。

前田利家という人は、秀吉が木下藤吉郎という足軽時代からの親友で、その頃から女房をとりもったりとりもたれたりの間柄。ともども出世して友情に変りはないが、同時に正義のためには友情とても容赦はしないというのが利家で、彼は正義派だ。その正義とは義であり忠であり、これ又秘密外交陰謀政治の当時には異例で、秀吉の天下になってのちは豊臣家というものを日本の中心と心得、自分の天下というような野心はもたない。

こういう御両人であるから信長以前の戦国乱世では大人物どころか三流四流の小者であり、大馬鹿野郎の律義者で笑われてもほめられることはない筈だが、天下の気風が変ってきたから、自然に諸侯の許す大人物となった。芸術の仕事は書き残しておけば他日認められて正当の評価を受けることも有りうるけれども、政治家などは現

実に機会にめぐり合わなければそれまでで、家康や利家ぐらいの人物はいつの時代にもいたであろうが、ちょうど時代に相応する、機会にあうということで力量手腕を全的に発揮して歴史に名を残すこととなる。力量手腕を存分に発揮する機会を得れば十人並以上の人なら相当のことは誰でもやれる。時代の支持があるかどうか、ということが問題で、家康の場合は時代の方が先に買い被ってでてきた。家康は十人並よりはよっぽど偉い人で、公平に判断しても当代随一の人傑であったが、時代が先についてきたのでむしろ時代に押されて自分自身を発見して行ったようなお人好しで鈍感でお目出度いところがある人であった。

家康が副将軍だなどと言われて大変な人望があるものだから、秀吉の側近の連中は家康の変に鄭重慇懃な律義ぶりを信用せず、三河の古狸には用心しなければというような疑心をいだいてそれとなく秀吉にほのめかす。そのたびに秀吉は、家康という人は案外あれだけの人で、温和な人だ、と言いきかせていた。家康は温和な人だという評言は秀吉の家康についての極り文句のようであった。秀吉は知っていたのである。然し、怖れていた。秀吉自身、彼は今こそ天下者であったが、信長の家来のころは天下などは考えない。彼の野心の限界は信長第一の家来ということで、その信長のあとをついで天下をという野望はなかった。たまたま信長が横死して自然に道がひらかれたから天下を狙って動きだしたにすぎなかった。彼もいわば温和な野心家、節度のある夢想児であったのだ。家康も温和な人だ。けれどもいつの日かその眼前に天下に通じる道が自然にひらかれたとき、そのときを思うと家康という人は怖しい。いったん道がひらかれた時、そのかみの彼自身が俄に天下をめざす獰猛な野心鬼に変じた如く、家康も亦いのちを張って天下か死かテコでも動かぬ野心鬼となる怖れがある。そういう怖れをいだくのも、家康自体にその危さが横溢しているためよりも、時代の人気があまり家康に有利でありすぎたせいだった。信長の下の秀吉などは凡そ世評はただ有能な家来の一人というだけのこと、柴田も丹羽も同じことで、信長と肩を並べるぐらいに副将軍などと言われるような人物はいなかったものだ。そこで秀吉は家康の温和さを疑ることはなかったが、世評の高さのために彼の心中ひそかに圧迫せられるものを堆積するようになっていた。それも彼が気力旺盛のころは、別に家康を怖れるというほどでもなかったのだ。

家康は子供の時から親を離れて人質ぐらし、他人の飯をくいながら育った人である。彼の生家は東海道の小豪族で、今川と織田にはさまれ、一本立の自衛ができず、強国にたよって生きる以外に術がない。家康の父広忠は今川にたより家康を人質として送ったが、今川の手にとどく前に織田の手に奪われてしまった。このとき家康は六ツであった。

織田信秀（信長の父）は家康を奪ったから広忠に使者をたて、今川との同盟を破って自分の一味につくように、さもないと子供を殺すと言わせたが、広忠は屈せず、子供の命は勝手にするがいい、同盟はすてられない、とキッパリ返答した。信秀はせっかくの計も失敗したが別段家康を殺しもせず、むしろ鄭重に養ってやったということで、二年間織田のもとに養われていた。八ツの年に信秀が死に、これにつけこんで今川勢は織田を攻めて、家康は助けだされたが、このとき父広忠はすでに死んでいた。改めて今川の人質となってお寺住い、坊主から教育を受けて十五まで他人の飯をくって育ったの

である。

八ツの年に、人質にでている間に父を失ったのであるから、家康には父の記憶がなかった。広忠は二十四の若さで死んだが、聡明な人だが病弱で神経質で短慮であったという。家康にとって父の記憶といえば父の風貌面影に就ては殆ど何も残っていない。ただ、今川へ人質に送られる途中、織田家の者に奪いとられ、その彼自身を種にして織田から徳川へ一味にせまったとき、子供ぐらい勝手にするがいいさ、同盟は破られぬ、とキッパリ答えてきたという父、これぐらいハッキリと記憶に残っている父はないのである。殺されるべき六歳の家康は殺されもせず、むしろ鄭重に育てられた。それは今川家に於けるお寺暮しの八年間よりもむしろもてなされ、いたわられたほどで、したがって家康の織田に対する記憶は元来悪くない。しかしながら、幼少年期の数奇な運命を規定した一つの原理、原理という言葉は異様な用法に見えるかも知れないけれども、幼少の家康にとって、それは恰も原理の如きものであったと思われる。なぜなら少年にとっては最も強烈な印象、強烈な信仰が原理なのであり、それは家康にとって最も強烈な印象であり信仰に外ならなかったからである。

その原理とは、父は自分をすてても同盟に忠実であった、という正義である。家康はその正義を信仰し、その父を心中ひそかに英雄化してはぐくんだ。父は自分をすてたにも拘らず、自分はむしろ織田の厚遇を受けた、そのことすらも父の正義の当然の報酬の如く感じた、或いは感じたがろうとした。こうした彼の環境をつらぬく原理が、やがて彼自身の偶像たる独自な英雄像を育てあげたので、彼が後年信長との二十余年の同盟に忠実であった当代異例の独自の個性がこうして生れつつあったのである。

彼の父が彼を棄てた如く、家康も亦自分の子供を人質にだし、煮られようと焼かれようと平気であった。家康を人質にだして勝手に殺すがいいさとうそぶいた広忠のまことの心事はどうであったか、これをたずねるよしもないが、わが子わが孫を人質にだした家康の場合は冷然たるもので、子供や孫ぐらい、彼は平然たるものであった。従って、彼は秀吉が小牧山の合戦のあとで母を人質によこしたり妹を嫁にくれたりして上洛をうながしたときにも、母や妹の人質などということにはなんの感動もなかったので、ただ時の勢いというものに冷静に耳をすまし目を定めていただけのことであった。

一般に野心家というものはわが子の一人や二人犠牲にしても野心のためには平然たるもののように見えるけれども、案外野心家には肉親的な感情の強い人が多いもので、祖先とか家というものと同化した動物のような保守家の方が却って肉親的に不感症で、家のためには子供の一人や二人煮られようと焼かれようとと本能的なつめたさを持っているものなのである。家名のためだなどと云って我が子を冷酷に追いだしたり、中には肺病の子供を家名のために早く死んでくれと願ったりする、そういう冷酷な特異性がもはや特に鋭く訴えてこないほど我々の身近には家名の虫のつめたさが横溢しているのだ。その御当人が自分のつめたさに気附かずに、甘ったるい家庭小説か何かに涙を流しているのだから笑わせる。人は涙というものを何かマジメに考えがちだが、笑いの裏と表にすぎないので、笑いが単なる風とその音にすぎなければ、涙などは愚かしい水にすぎない。妙に深刻に思われるだけむしろバカげたものである。

家康も保守家であった。そして彼は子供だの孫だのの二人三人は

どうなろうと平気の平左の人であった。律義者で、温和な考えの人だ。そして、自分に致命傷の危険がなければ人が何をしようと、どんなに威張ろうと、朝鮮へ遠征しようと、親類の小田原を亡ぼそうと、我関せずでいる人だ。時世時節なら何事も仕方がないという考えで、秀吉の幕下に参じて関白太閤などと拝賀することぐらい蠅が頭にとまったほどにしか考えていない。

　このままいつ死んでもそれでよし、そういう肚の非常にハッキリした家康で、そういう太々しい処世の骨があったから、野心家のようにあくせくしないが、底の知れないようなところがある。それで古狸などと思われるが、根は律儀で、ただいつ死んでもいいという度胸の生みだした怪物的な影がにじんでいるだけである。

　いつ死んでもいいという最後の度胸はすわっていたが、平常の家康はお人好しで、小心な男であった。彼は五十ぐらいの年配になっても、まだ、たとえば近臣が何かの変事を告げ知らせると、忽ち顔色青ざめて暫く物が言えなくなるたちであったという。秀吉の死後、三成一派が家康を夜襲するという噂の時にも彼は顔色を変えてしまったということで、いい年配になってもそういう素直な人だ。素直という意味は、たとえば我々のような凡人でも、四十五十になれば事に処して顔色を変えないぐらいの稽古はできる。我々は内心ビクついておりながら顔色だけはゴマかすぐらいの習練はできるのである。それは形の上の習練で内容的には一向に習練されてはいないのだが、家康という人は、つまりそういう虚勢の、上ッ面だけのお上手が下手であった証拠だ。彼は顔色を変えしばしば声もでなくなるぐらい顛倒するが、やがて考え、そして考え終ると度胸をきめる。そうするとテコでも動かない度胸の男になるので、負けると分った信玄との一戦にも断々乎として出陣する、秀吉と小牧山で戦い、そうかと思えばアッサリ上洛し拝賀もする。彼の家来の目には薄氷を踏むような危険にみちた道を、主たる彼のみが常に自信をもって踏み渡っていた。その自信とは、ままよ、死んでもいいや、ということだ。彼は命をはる人であった。そのくせ彼は命をはって天下を望んでいたわけではない。命をはって、ただ現在の生存を完うしていたというだけのことなのである。

　秀吉が死ぬ。すると家康が意志するよりも、世間の方が先に意志し、彼は世間の意志に押されて自分自身を発見し、意志するような有様だった。加藤清正などという秀吉子飼いの荒武者まで三成を憎むのあまり家康支持に傾くというのだから家康とても思いの外であったろう。福島正則の如きまで禁を承知で家康と婚を結ぼうとする、いわんや黒田如水などはわざわざ九州から出ばってきて家康を護衛する、名目は三成の天下の野望を封ずるためとあるのだが、それはうわべだけのことで内実は家康の天下を見越してすこしも先に忠勤を見せようというさもしい心掛けだ。

　前田利家が死んだ夜、黒田、浅野、加藤などという朝鮮以来三成に遺恨を含む連中が三成を襲撃しようとした。三成は女の籠に乗って宇喜多の邸へ逃げこんだが、更に家康の邸へ逃げこんできた。追跡してきた面々が騒いでいるのを家康が玄関へ出て行って、諸君の顔も立つようにする、三成は政界から引退させるから助命させてやってくれと頼んで引きとらせた。その夜更けに本多正信が家康の寝所へでかけて行って、三成のことはどうお考えで、と尋ねると、家康は、アア今それを考えているところだ、左様ですか、お考え中なら別に申上げることもありますまい、と引下ってきたという。正信

の考えでは三成を生かしておけば今に徒党を結んで反乱を起す。なまじいに今殺してしまうと、反家康党の反乱という一とまとめに敵を平げる火口を失うことになるから、ここは生かしておいて反乱を起させる方がよいという考え、それを家康に上申するつもりであったが、家康が思案中だというから、家康の思案なら自分の考えと同じところへ落ちる筈だと呑みこみよろしく引下ったのだという。こんな話は無論後世の作り話で、家康一代の浮沈を決する大問題を禅問答の要領で呑みこんでくるなどというバカげた筈があるべきものではない。特に家康正信はしつこいほど慎重なたちで、かりそめにもかかる軽率なやりとりですませるような人柄ではなかったのである。

　然し三成をかくまい、翌朝は護衛までつけて佐和山へ送ってやった家康の肚は、三成を生かしておけばやがて反乱のあげく三成党を一挙に亡しうるという、家康がその肚であるばかりでなく、三成がその肚を見抜きここへ逃げれば必ず助けられると見越して逃げこんだのだという。両々ゆずらず、神謀鬼策、蛇の道は蛇、火花をちらす両雄の腹芸というところだが、話が出来すぎているようだ。

　家康は温和な人だという秀吉の口癖は見る人には共通の真実であり、三成もそれを知っていたのだと思う。家康とてもこの微妙な時代に先の見透しなどがあるべき筈はない。結果に於て関ヶ原で勝っているから、まるでそれを見越した上での芸当だったと片づけているのだが、関ヶ原は一大苦戦で、秀秋の裏切りまでは、家康はすでに自らの敗北を信じていた。彼は無我夢中で爪を噛んで、小伜めにだまされたか、口惜しや口惜しやと歯がみをしていたという。彼は不利の境地に立つと夢中で爪を噛む癖があったそうで、小伜めというのは金吾中納言秀秋のことだ。この小伜は元来秀吉の甥で、秀吉の養子となって育ったのだが、黒田如水らのとりもちで小早川隆景の養子となった。朝鮮役では秀吉の名代格で黒田如水を参謀に出陣したが生来の暗愚で、朝鮮の戦争でも失策をやり秀吉の怒りにふれて筑前七十余万石から越前十五万石へ移封を命ぜられたのである。ところがまだ越前へ移らぬうちに秀吉が死に代って政務を見るようになった家康のはからいで移封は有耶無耶に立消えてしまった。如水とは深い関係があり家康には恩義があるから、関ヶ原へ出陣のため九州を立つ時から如水のすすめで裏切りの約束を結んでいた。この裏切りがなければ、まさしく家康は爪を噛み噛み関ヶ原の露と消えていたのであった。

　三成は四面楚歌であるとはいえその背後には豊臣家があり、家康の党類は多いと云っても、その中のある者は反三成の故に家康に結ぶだけで、豊臣徳川となればハッキリ豊臣につく連中だった。そういう微妙な関係にあって、三成にことさら反乱を起させてまとめて平げようなどという利いた風な細工が自信満々でっちあげられるものではないので、家康には利いた風な見透しなどというものはなかった。彼はただ肚をきめていた。なるようになれ、死ぬか生きるか。そして彼はともかく自分をたよって逃げこんできた三成を殺すような小細工はできないのだ。うられた喧嘩は買うが、逃げこんだ敵は殺すことができない。家康はまさしく温和で、モグリのできない人であった。

　関ヶ原で勝つまでは何が何やら目算の立てようもなかったろうと思われる。淀君派と政所派の対立だの、反三成党の発生だの、それらは曾て目算に入れようもなかったことで、まったく目新しい現実

であり、彼は現実に直面して一つ一つ処理するだけで精一杯であったろう。そしてそれらの現実の勢いというものを嗅ぎわけて、その勢いに乗れるところまでは乗ろうとする。副将軍むしろ摂政というような格式で諸侯の拝賀まで要求する、どこまで勢いに乗って行けるか、ともかく最後は戦争だ。それだけは分っていた。全てをその一戦に賭ける肚だけはきまっていたが、そこから先の目算はなかった筈だ。

彼が始めて天下をハッキリ意識したのは関ヶ原に勝ってからだ。ここで始めて慾というものがでてきた。其時までは肚をきめて一々の現実に対処するのが精一杯というだけのことであった。

保守家で温和で律儀な男が、はからずも自然に天下を望む最前面へ押しだされてしまったので、保守家で事なかれの小心者でも往々にして野心を起して投機などにひっかかるのは世の中に良くある例だが、こういうてあいが慾にからみ我を失うとあくどいことをする。家康は持って生れた用心深さでウィリアム・アダムスから外国事情をきき、自身幾何学の初歩の講義をうけたりして外国というものを知ろうとしたが、又、間者を外地へ派して外国の風俗文化宗教などを探らせ、このやり方は言うまでもなく内地の諸侯に対しては一層綿密であったのは言うまでもない。

けれども豊臣を亡すという最大眼目のこととなると、駄目なので、どうせ奪いとる天下なら有無を言わさず取ってしまえばよいものを、何がなそれらしい名目なしに事を起すということがやりにくい。三好松永流のクーデタができない性分なのである。

こう慾がでてしまうと彼はもう凡人で、この頃から変事にあっても顔色を変えなくなったそうだが、つまり大人になったのだ。その代り肚をすえ命をすててかかるという太々しさ純潔さは失われて、勢いに乗じて自我の抑制もつつしみも忘れただ慾の皮の仕上げをたのしむだけの老獪な古狸になってしまった。彼は齢をとってきた。クーデタがきらいだなどというちにいつ死ぬかも知れない怖れもまじってきて、恥も外聞もなく狸婆アの嫁いじめのような泥くさいことを平然とやってのけたが、古今東西、天下をとった男の中でこれぐらい不手際のとり方はめったにない。こんな下手クソな見えすいた口実をつけるぐらいなら始めからアッサリ武力に訴えて然るべきであろうに、それが出来ずにこういう泥くさい不手際でかすめとったというのは、彼はつまり凡そ人の天下をとるにふさわしくない場違い者であった証拠である。

時代というものは奇妙なもので、決してその時代の最大最高とは限らない人物が、時の流行の思潮によって最大最高の位置につく。その下役の参謀などに却って人物がいても、時代は識見と相応せずに人柄と取引するような場合が多いので、柄が時代に合わないと、どうにもならないものである。

芸術などは思潮自体流行的なものだから別してそうで、流行作家というものは時代思潮を血肉化して永遠の足跡を残す人は案外少くむしろ歴史的には埋没する性質の多いものなのである。

家康という人は力ずくで人の天下をとるべき性質の人ではないので、よい番頭、よい公僕、そういう人で、議会政治の政治家としては保守党の領袖などにまア似合う人だ。そして新聞から優柔不断だの新味がないだのと年中コッピドクたたかれている人だ。それが戦国時代に生れて奇妙に衆に押されて前面へでて、最後にはファッショの御大のようなクーデタをやらざるを得なくなったから何とも

珍無類な古狸の化けそこないのような不手際な天下のとり方をしたのである。

政治家としては新味もなく政策も平凡な保守家で、ただ間違いがないという点で結局保守党の領袖にはなる人であったろう。然し、いざという時に際して、いのちを賭けて乗りだしてくる気魄（きはく）だけは稀（まれ）であり、その賭博が野心に賭けられているのでなく、ただ現実を完うするだけの小さな現実の誠意にかかっている点で、珍重すべきものであったと思われる。

アメリカの軍陣医学によると、爪を噛む癖の男は戦争にでると恐怖のあまり発狂するのが通例だということである。すると家康も一兵卒で戦場へでると、臆病者で物の役に立たないような男であったかも知れぬ。実際彼は小心で、驚くたびに顔色を変えるという人物でもあったのである。幸い彼は桶屋の伜や百姓の二男坊や足軽の家などに生れずに、大将の家に生れて、始めからそういう教育を受け、戦争を自主的に行う立場であったから、兵卒なら発狂する線を踏み越えて意慾的な行動をすることができたのかも知れない。彼の足跡をつぶさにふりかえると、この想像も必ずしも奇矯（ききょう）ではないようである。古狸よりは、むしろお人好しの然し図太いところもある平凡な偉人であったようだ。

（初出誌未詳）

青空文庫情報

底本：「桜の森の満開の下」講談社文芸文庫、講談社
1989（平成元）年4月10日第1刷発行
2015（平成27）年4月15日第47刷発行
底本の親本：「坂口安吾選集第六巻」講談社
1982（昭和57）年5月刊
初出：「新世代　第二巻第一号」新世代社
1947（昭和22）年1月1日発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：日根敏晶
校正：まつもこ
2017年9月24日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

家康

坂口安吾

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/